

Prevalence of Factors Related to Active Reproductive Health Behavior: A Cross-sectional Study Indonesian Adolescent, *Epidemiology and Health* 38: 1–10.

インドネシア語文献

Pusdatin KemKes. 2019. BAB V. Kesehatan Keluarga. In Pusat Data dan Informasi Kementrian Kesehatan Republik Indonesia, *Profil Kesehatan Indonesia 2018*. pp. 111–170.

サンタクルーズ諸島における羽毛貨トアウの現在

山口 優 輔*

はじめに

本報告はソロモン諸島国テモツ州における結婚様式と羽毛貨を紹介する。

テモツ州は国の最東部に位置する州であり、州都ラタがあるネンド島を中心に構成される州である。ネンド島から北東にリーフ環礁とダフ諸島が、南東にウトゥプア島とヴァニコロ島が、東にティコピア島とアヌタ島が位置しており、この一帯を合わせてサンタ

クルーズ諸島と呼ぶ（図1）。

筆者は2019年9月から2020年3月に、ダフ諸島（ラタから約180キロメートル）およびリーフ環礁（同約80キロメートル）においてフィールドワークを実施した（図2）。リーフ環礁の島の多くはサンゴ礁の「低い島」で構成され、ほぼ全ての島に人が居住

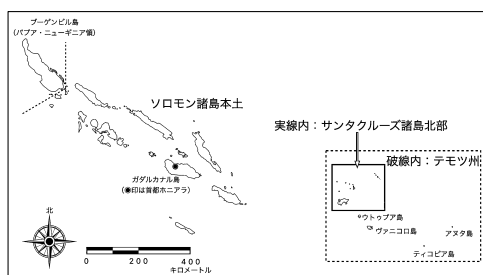


図1 ソロモン諸島国内におけるサンタクルーズ諸島の位置

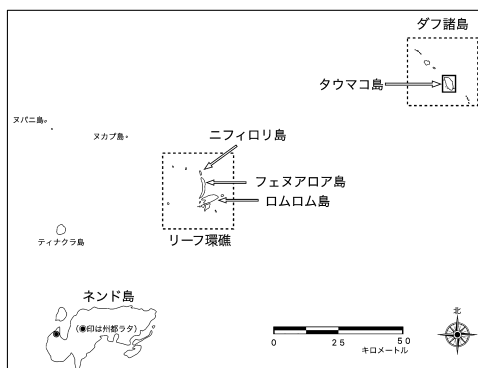


図2 サンタクルーズ諸島北部におけるネンド島・リーフ環礁・ダフ諸島の位置

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

している。一方、ダフ諸島は隆起性火山島の「高い島」と3つの人工島で構成されるが、人が居住するのは最も大きなタウマコ島とその周囲の人工島に限られる。

ソロモン諸島の国民の大半はメラネシア系の人々であるのに対し、離島部には域外ポリネシア (Polynesian outlier) と呼ばれる人々がいる。リーフ環礁では島によってはメラネシア系だけでなくポリネシア系の人々が居住し、ダフ諸島には主にポリネシア系の人々が居住している。

羽毛貨について

サンタクルーズ諸島ではメラネシアとポリネシアの人々が古くから交流したため、独特な文化が数多く残されている。そのひとつに伝統的な貨幣の羽毛貨トアウ (tevau) が知られている。この羽毛貨は、鳥の真紅の羽でつくられた貨幣であり、男性が妻をもらう際の婚資、カヌーや豚などの購入、規則を破った際の賠償など幅広い用途で用いられてきた [田井 1996]。



写真1 一般的な羽毛貨 (国立民族学博物館にて筆者撮影)

一般的な羽毛貨の形態は、幅5センチメートル、長さは引き延ばされた状態で約5から9メートルのベルト状で、その片面に学名 *Myzomela cardinalis* というミツスイの真紅の羽毛が全面に貼り付けられている。通常ベルトは巻かれて保管されている (写真1)。用いられる鳥はココナツの殻を用いた罫によって捕獲される。一般的な大きさの羽毛貨に対し、300羽のミツスイが必要とされる [田井 1996]。

これらの羽毛貨はサンタクルーズ諸島全体で交易に用いられてきたが、羽毛貨の製作には複雑な伝統的技術を必要とし、その製作はネンド島の技術を伝承する者に限られていたという [Davenport 1962]。

幅広い用途で用いられてきた羽毛貨だが、植民地政府の介入やソロモン諸島国政府紙幣の発行、また若者たちが羽毛貨の製作を嫌うようになったために、羽毛貨の貨幣としての価値は衰退の一途を辿っている。

ソロモン諸島の一部では、男性が女性両親に対価としての婚資を支払い、嫁を「買う」ことで結婚が承認される習慣がみられる [柿澤 1996]。サンタクルーズ諸島ではこの嫁を「買う」ための婚資に羽毛貨が伝統的に用いられてきたが、現在では代わりに紙幣を用いる機会が増えているとされる [田井 1996]。

ダフ諸島における現在の結婚様式

さてここで、ダフ諸島でみられた、タウマコ島の男性と人工島タファアの女性との結婚式について紹介する。2020年1月におこなわれた。



写真2 棒に挿した紙幣を妻側両親へと運ぶ夫側親族の女性たち

結婚を申し入れる日より以前に、夫になる男性は予め自身の親族の協力を得て婚資を揃える必要があった。婚資が揃うと、夫の女性親族がそれをもって、妻側の待つタファへと向かった。

ここでは羽毛貨が用いられることはなく、紙幣が用いられた。紙幣は1メートルほどの棒に100ソロモンドル（1ソロモンドルは約15円）紙幣を10枚単位で差し、それを今回は8本（8,000ソロモンドル）用意していた。

タファに到着すると、夫側女性親族は、婚資の棒を掲げながら妻側の両親の待つ家へと入っていった（写真2）。家の中では夫側親族が妻側の両親に対し婚資を渡すことで、娘を貰う了承を得ていた。妻側両親の承諾後、夫側親族の女性たちが花嫁を連れ出し、再び列をなして花嫁を着飾る家へと移動した。

次の家は女性と子どもだけが中に入ることを許され、中では花嫁が華やかな衣装に着飾られていた。花嫁が着飾るのを待つ間、他の男性たちは家の周囲で談笑しながら待つお

り、女性や子どもたちから檳榔やタバコ、お茶などが配られ、天花粉や香水、スプレーなどを顔や腕に塗られながらもてなされた。

花嫁の着飾りが終盤に差し掛かると、外で待つ人だかりの中から、数人の「チーフ」と呼ばれる首長男性たちが順々に話し始めた。あるチーフは花嫁の両親が結婚を承認した旨を報告し、またあるチーフは、新しい生活を始める2人の門出を祝う言葉や新しい家族を自身のコミュニティに迎えることができた喜びについて演説した。

その後、着飾った花嫁と両家親族の女性たちは、夫の居住する地区へと列をなして向かった。花嫁たちの列を追うように、他の親族たちもそろそろと列に続いた。タファからタウマコ島本土へは海を徒歩で渡って移動した。

タウマコ島本土に上陸後、花嫁の列は夫の待つ家へと向かったが、到着した際、夫は畑に外出しており不在だった。結婚式としては花嫁が婿の家に着した際に終了とみなされ、親族数名を残してほかの者は解散し結婚式は終了した。

結局、最後まで羽毛貨が登場することはないかった。

ダフ諸島およびリーフ環礁において現在残されている羽毛貨の知識

住人らによると、ダフ諸島において、羽毛貨は現在貨幣として全く流通しておらず、製作している者は誰もいないという。また、島には未だに羽毛貨を所有する者もいるらしいが、滞在中に確認することはできなかった。



写真3 かつてダフ諸島で羽毛貨用に獲られていたミツスイ (*Myzomela*) 属の鳥

一方で、高齢者のなかには羽毛貨についての製法を知っている者もいた。鳥の捕獲方法の知識も残されていた。

鳥の種を確認するため、現地の少年がこの鳥を捕まえてくれた。それはミツスイ属に分類 (*Myzomela*. sp) され、頭部から胸部、そして背側の一部が真紅に覆われ、残りは黒色の羽に覆われる全長10センチメートルほどの個体であった (写真3)。観察後に、この鳥は逃がした。

リーフ環礁においてもダフ諸島と同様に流通している羽毛貨を確認することはできなかった。ニフィロリ島では羽毛貨を製作し、所有している者もいると聞いたが実物は確認できなかった。

環礁のフェヌアロア島では羽毛貨を所有している世帯があった。しかし、この羽毛貨は、これまで知られてきた帯状の羽毛貨とは形態が異なり、木製の棒のようなものの周囲に真紅の羽毛を巻き、その先端に赤から黒へのグラデーションの羽が放射状に伸びるように取り付けられた棒状の羽毛貨だった (写真4)。



写真4 リーフ環礁フェヌアロア島で正面 (左) と上部 (右) から撮影した棒状の羽毛貨

いくつかのバリエーションもあり、棒の周囲に帯状に黄色い羽毛を混ぜたものや、先端に赤とは異なる白い綿毛のような羽を取り付けたものもあった。一般的な羽毛貨が約300羽のミツスイを必要とするのに対し、この棒状の羽毛貨は1本約3羽で充分という。もしこの棒状の羽毛貨を現在の価値で人に売るならいくらぐらいかと尋ねたところ、1本あたり約100ソロモンドルという回答であった。

おわりに

ダフ諸島における現在の結婚様式では、羽毛貨を婚資として用いていることは確認できなかった。婚資としての羽毛貨は既に紙幣に移行していることが裏付けられた。

このように羽毛貨の利用はなくなった一方、まだ所有している者や製法を知っている者もいることからすれば、知識が消滅したわけではない。

また、これまで羽毛貨作りはネンド島でおこなわれるといわれてきたのに、リーフ環礁

でも作られていることが確認された。これは注目に値する。今回確認された棒状の羽毛貨は、形状こそ一般的なベルト状のものと異なるが、現在においても製造されていたのである。

これらの羽毛貨が、現在どのような役割を果たしているのかは、今後の調査が必要である。可能性としては、ネンド島への輸出を目的として製造されており、またネンド島では伝統的儀式や、何らかの取引に用いられるというものである。

婚資や結婚式においてすらも、既に羽毛貨は使われなくなっていたが、羽毛貨がまだ消

滅したわけではない。羽毛貨についての記録と、現代における役割の解明が必要なのである。

引用文献

- 田井竜一. 1996. 「羽毛貨」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活史—文化・歴史・社会』明石書店, 152–158.
- 柿澤由美. 1996. 「くらしと女性」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活史—文化・歴史・社会』明石書店, 348–357.
- Davenport, W. 1962. Red-Feather Money, *Scientific American* 206(3): 94–104.

Saviors to the Citizens or Mere Entrepreneurs? Fluidity of the Informal Management of *Tera Askebari* in Addis Ababa

Eunji CHOI *

Cell Phone Pickpocketed at Minibus Terminal
As many of the *faranji* (foreigners) who often use minibus in Addis Ababa know from experience, taking a minibus requires great attention because the moment you let your guard down, you may lose your personal belongings! This happened to me around six years ago when I was taking an Amharic class

at Addis Ababa University (AAU). One day, my friend Chen, a Chinese student working on her master's degree at AAU, and I decided to go to the central post office to pick up some parcels. Since I was not used to taking minibuses, Chen kindly instructed me about which routes I should take. After completing our errand, we went to a nearby station in

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University